

特殊学級担任の職務環境が個別の指導計画作成に及ぼす影響

長谷川 哲

問題

平成11年の盲・聾・養護学校学習指導要領において、個別の指導計画作成が明示された。鹿児島県教育委員会(2005)の調査では、盲・ろう・養護学校での個別の指導計画作成率は、100%であった。しかし、特殊学級での、個別の指導計画作成率は、55%に止まった。

また、特殊学級担任の実態を明らかにした研究を概観してみると、特殊学級担任が3年程度で交代する、教職年数30年以上のベテラン教師が初めて担当するケースが多い、特殊教育教諭免許状を有していない、希望していないのに担任を命じられる、同僚の特殊教育(担任)への理解がなく孤立しがち、といった実態がある(笠原, 1998)ことが報告されている。このように特殊学級担任が職務を遂行する環境は、通常校の教師や養護学校の教師と異なっている。特殊学級担任をとりまく職務環境が個別の指導計画作成をより困難にしていることが予測される。

目的

小・中学校の特殊学級担任の個別の指導計画作成に関する実態と特殊学級担任の職務環境及び個別の指導計画作成に対する意識の構造を明らかにし、特殊学級担任の職務環境が個別の指導計画作成に対する意識に及ぼす影響を検討する。併せて小・中学校特殊学級担任の職務環境に対する意識が校種、及び盲・ろう・養護学校勤務経験の有無によってどう異なるのかについて検討する。

方法

新潟県の特殊学級担任190名を対象に郵送による質問紙調査を行った。研究 Ⅰでは、特殊学級担任の個別の指導計画作成に関する実態調査を行った。研究 Ⅱでは、特殊学級担任の職務環境が個別の指導計画作成に及ぼす影響を重回帰

分析を用いて明らかにした。

結果及び考察

1. 研究

1) 個別の指導計画作成の有無

個別の指導計画作成の有無について回答を求めた。「全ての児童生徒に対して作成している」と「全員ではないが作成している」を合わせた回答は、小学校特殊学級担任で90.3%, 中学校特殊学級担任で80.0%であった。しかし、新潟県内全ての特殊学級担任を対象としていないため、新潟県内全ての特殊学級において個別の指導計画が作成されているとは言い難い。

2) 個別の指導計画作成の成果と課題

個別の指導計画作成の成果と課題について自由記述による回答を求め、KJ法を参考に整理、集計した。成果については、小学校特殊学級担任、中学校特殊学級担任ともに、「課題や目標の明確化」という回答が最も多かった。課題については、「時間と労力がかかる」が最も多かった。また、作成プロセスがあいまいであるという結果が明らかになった。安藤(2001)は、個別の指導計画作成の目的論の検討と時間的コストを低減させるための作成手続きが求められると述べており、個別の指導計画作成の目的とその手順をより明確にしていく必要がある。

2. 研究

因子分析の結果、特殊学級担任の職務環境については、「活発な意見交換が行われる職場の雰囲気」、「個別の指導計画作成に関する情報交換と校内支援」、「校長の適切なリーダーシップ」、「校内教員の特別支援教育に関する積極的関心」の4因子が抽出された。個別の指導計画作成に対する意識は、「優先性」、「多忙感」、「既知性」、「義務感」の4因子が抽出された。

次に、特殊学級担任の職務環境に対する意識

表1 因子 の測定項目と因子負荷量($\alpha = .89$)

番号	負荷量	内容
13	.815	私の学校では、教員間において意見交換が活発に行われている。
12	.765	私の学校では、気を遣うことなく自分の意見を述べるができる。
1	.754	私の学校には、教員同士で議論しやすい雰囲気がある。
40	.604	私の学校では、子どもの問題についてじっくりと検討しようとする雰囲気が感じられる。
2	.600	私の学校では、すべての教員の意見が尊重される。
33	-.560	私の学校では、ある特定の人の意見に集団が流されやすい。(R)
41	.557	私は、現在の学校で働くことに満足している。
49	-.523	私の学校の教員は、特殊学級について関心がない。(R)
9	.490	私の学校は、研修や出張に参加しやすい校内体制が整っている。
19	.442	私の学校は、特殊学級の子どものニーズに応じた交流教育に学校全体で取り組んでいる。

表2 因子 の測定項目と因子負荷量($\alpha = .86$)

番号	負荷量	内容
38	.790	私は、特別な支援を要する子どもの授業における指導の進め方についての相談を通常学級担任から受けている。
28	.680	私は、通常学級担任から特別な支援を要する子どもへの対応の仕方について相談を受けている。
35	.634	私は、すでに個別の指導計画作成について十分検討している。
46	.633	私は、通常学級担任から就学指導についての相談を受けている。
3	.630	私は、個別の指導計画に関する研修会に積極的に参加している。
6	.570	私は、学級経営に悩んだときは、校外の特殊教育に携わる教員に相談する。
25	.560	私は、個別の指導計画の作成に関する資料を収集している。
34	.546	私は、個別の指導計画作成に関する情報を校内の他の教員に提供している。
18	.533	私は、地域の特殊教育に携わる教員と話をする機会が多い。
29	.522	私は、地域の特殊教育に関する研修等に、積極的に参加している。

が特殊学級担任の校種及び盲・ろう・養護学校経験の有無によってどう異なるのかを検討するために二元配置分散分析を行った。その結果、「個別の指導計画作成に関する情報交換と校内支援」と「校内教員の特別支援教育に関する積

表3 因子 の測定項目と因子負荷量($\alpha = .86$)

番号	負荷量	内容
20	.772	特別支援教育を推進するために、校長自ら各教師に適切な指導・助言を与えている
8	.729	校長は特殊教育において適切なリーダーシップを発揮していると思う
31	.715	特別支援教育の推進において、校長の教育理念が反映されている
11	.609	校長は教員を励ますことが多い
17	.547	私は、学級経営や子どもの問題を管理職に気軽に相談できる
48	.540	校長は、日頃から特殊学級を参観し、適正な評価をしてくれる
23	.516	校長には、教員の事務的な負担を軽減しようとする姿勢が見られる

表4 因子 の測定項目と因子負荷量($\alpha = .87$)

番号	負荷量	内容
32	.872	私の学校の多くの教員が、特別支援教育の研修の必要性を感じている
22	.783	私の学校の多くの教員が、特別支援教育についての外部講師を招いて研修したいと思っている
10	.646	私の学校の多くの教員が、特別支援教育について学びたいと考えている

極的関心」で校種による主効果が有意であった($F(1,156)=4.359, p<.05$; $F(1,156)=14.918, p<.01$)。2因子ともに小学校の方が高得点を示した。また、「個別の指導計画作成に関する情報交換と校内支援」で盲・ろう・養護学校勤務経験の有無による主効果が有意であった($F(1,156)=5.086, p<.05$)。盲・ろう・養護学校勤務経験有りの方が高得点を示した。

さらに抽出された特殊学級担任の職務環境に対する意識の4因子を説明変数に、個別の指導計画作成に対する意識の4因子を基準変数とし、重回帰分析を行った。その結果、「優先性」に対して「個別の指導計画作成に関する情報交換と校内支援」と「校内教員の特別支援教育に関する積極的関心」が正の影響を及ぼしていた。「多忙感」に対して、「活発な意見交換が行われる職場の雰囲気」が負の影響を及ぼしていた。「既知性」に対して、「個別の指導計画作成に関する情報交換と校内支援」が正の影響を及ぼしていた。「義務感」に対して、「活発な意見

表5 因子 の測定項目と因子負荷量($\alpha = .78$)

番号	負荷量	内容
17	.871	私にとって、個別の指導計画作成は最優先課題である
6	.713	個別の指導計画作成は、私にとって職務の中核を成す
24	.521	私の学校にとって、特別な教育的ニーズのある子どものための個別の指導計画作成は最優先課題である
16	.479	個別の指導計画を作成することで、指導内容、方法が適切かどうかの不安が軽減される
20	.479	自分の指導を見直す機会として、個別の指導計画がある

表6 因子 の測定項目と因子負荷量($\alpha = .70$)

番号	負荷量	内容
4	.738	私は、放課後に教材を準備する時間がない
15	.716	私は、職務を遂行する上で、いつも時間に追われている
10	.562	私は、勤務時間内に、指導のことについて考える暇がない

表7 因子 の測定項目と因子負荷量($\alpha = .76$)

番号	負荷量	内容
2	.729	私は、どのように個別の指導計画を作成すればよいかわかっている
13	.716	私は、どういうものが個別の指導計画であるかわかっている

表8 因子 の測定項目と因子負荷量($\alpha = .72$)

番号	負荷量	内容
21	-.688	個別の指導計画は、作成しなくてもよいのであれば、作成したくない(R)
11	.631	個別の指導計画作成は当然のことである

交換が行われる職場の雰囲気」が正の影響を及ぼしていた。以上のことから、個別の指導計画作成を優先的に捉えるためには、個別の指導計画作成に関わる校内外の教員との情報交換と校内教員の理解が重要であることがわかった。また、個別の指導計画作成に対する多忙感や義務感には職場の雰囲気が影響することがわかった。

まとめ

本研究の結果、個別の指導計画作成への意欲は高いが、多忙感も抽出された。さらに、研究

表9 特殊学級担任の職務環境に対する意識と個別の指導計画作成に対する意識の重回帰分析結果 (標準偏回帰係数: β)

説明変数	基準変数			
	優先性	多忙感	既知性	義務感
活発な意見交換が行われる職場の雰囲気	.023	-.257***	.113	.163*
個別の指導計画作成に関する情報交換と校内支援	.308***	.001	.521***	.051
校長の適切なリーダーシップ	-.023	-.098	-.004	.006
校内教員の特別支援教育に関する積極的関心	.288***	.094	.090	.122
重相関係数	.403***	.253**	.528***	.149

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

では、作成率が高いものの作成プロセスがあいまいであることがわかった。個別の指導計画作成は、明確な目的が共有されていないと多忙感が強化され、義務感に起因する職務の形骸化を招いたり、作成プロセスがあいまいであると説明責任が果たせなかったりする(安藤, 2001)。意義ある個別の指導計画作成にするためには、「活発な意見交換が行われる職場の雰囲気」のある職務環境を整えることが必要である。加えて、個別の指導計画作成の目的や作成プロセスを明確にすることが重要である。

文献

- 安藤隆男(2001)自立活動における個別の指導計画の理念と実践: あすの授業を創造する試み. 川島書店.
- 鹿児島県総合教育センター(2005)個別の指導計画に基づく授業の在り方に関する研究. 鹿児島県総合教育センター紀要, 108, 1-69.
- 笠原芳隆(1998)特殊学級担任が抱える学校経営上の諸問題: 学校経営との関わりから. 上越教育大学紀要, 17(2), 687-696.